

第5回協議会での意見概要

周辺有効活用について

区分	意見概要	事務局等による回答等
自然環境の保全について	<ul style="list-style-type: none"> 可能であれば、中州の野焼きを一度お願いしたい。現在、立ち枯れ状態のヨシやアシが青々と回復するのでは。また、野焼きの灰が土となり様々な植物や生物が集まるのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> 野焼きはダイオキシンの関係で、慣行的なものを除いて法的に禁止されている。ただし、NPOなどの活動として、範囲を指定した野焼きについては、検討の余地がある。 現在、ヒバリなどの営巢の時期などに留意しつつ、刈り取りを実施している状況である。
	<ul style="list-style-type: none"> 昭和47年頃、オニバスの群落が多く確認できたが、次第に減少し、現在ではほとんど見られなくなっている。ただし、種は眠っていると考えられる。 オニバスが減少した原因を考える上で、水位や水質の変化、水門管理方法の変更などの情報があれば教えていただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在の水門は昭和44年頃の竣工であるが、これにより、多孔質であった整備前に比べ密封度の高い状況になっている。 水門整備当時の水位など詳細な記録がなく、現在と比較できないが、操作方法は当時からほとんど変わっていない状況である。 昭和47年以降、河床の改変を受けるような洪水がないため、オニバスの種が退化した可能性が考えられる。 オニバスは、水質の汚濁にも強い植物であるが、現在、その根が腐ってしまうような水質、底泥の状態にあると言える。

塩水導入について

区分	意見概要	事務局等による回答等
潮位の上昇による影響について	<ul style="list-style-type: none"> 塩水導入との直接的な関係は薄いですが、近年の気象変化に伴い児島湾の潮位も高くなっており、潮位や地下水の変化などを長期的な視点から把握する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 地下水も含め周辺環境の動向について、関係機関と連携しながら、追跡していきたいと考えている。
児島湾への影響について	<ul style="list-style-type: none"> 下げ潮時の塩水導入では、巻き上がりによるヘドロの流出が懸念されるため反対である。上げ潮時ならば、濁りもある程度押さえられるので了承できる。 水門1門だけの開放の場合、水流が速くなり濁りが増すのでは。むしろ、全門開放が望ましいのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> 川側、海側を含めた水門周辺の底泥が、メタンガスの発生に至るような還元状態まで悪化していることが、環境面の重要課題となっている。その対策として、長良川などの事例からも、海水の出入りが効果的と考えている。
農業面からの見解について	<ul style="list-style-type: none"> 風による塩害が懸念され、塩害防止とともに、発生時の対応を含めた対策が必要である。また、非かんがい期においてもポンプでの取水があり、十分な注意が必要である。 政田学区の意見交換会では、塩水導入への反対が総論であった。地区の関係者、代表者の了承が必要である。 かつて、百間川の改修及び淡水化と併せて、百間川内の用水路を廃止し、ポンプによる取水へ移行した経緯があり、塩水導入には矛盾と憤りを感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> しかし、塩害や濁りの問題に対し、慎重な検討の下、より安全な実験とする必要がある。 そのため、塩水の滞留時間が短くできる下げ潮時に、少量の塩水を導入し、塩水の挙動を確認しながら、滞留時間が長くなる上げ潮時での実験に移行したいと考えている。 また、地元の理解を得るためには、塩分濃度や濁度の状況が、常に誰もが確認できるモニターのシステムを備えるとともに、実験中止の基準を明確化する必要がある。
漁業面からの見解について	<ul style="list-style-type: none"> 現在、魚が臭くなったり、死んだりしており、塩水導入による改善効果を期待している。 農業面への被害があってはならないが、水質の悪化がさらに進めば、農業も漁業もだめになる。双方の両立に配慮しながら、安全性に対する専門的な検討を進めていただき、早期実施をお願いしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 本日の貴重な意見に対し、実験方法などの詳細な部分を詰め、基本線での地元の理解と合意が得られるよう進めていきたいと考えている。
実験後の方向性について	<ul style="list-style-type: none"> 実験結果が良好であった場合、通常時において実施していくのか。実験だけではあまり意味がないのでは。 	<ul style="list-style-type: none"> 水質改善の目的であれば、定期的な実施で効果が得られるが、汽水域の生態系を期待する場合は、日常的な実施が必要となる。